

佐藤先生お元気で

阪 口 豊 (地 理)

佐藤先生 私が地理学科に入学した時、たしか先生は講師だったと記憶しております。ですから、先生とお呼びするのが礼にかなっているのかも知れませんが、ここでは佐藤さんと呼びさせていただきます。その方が、師弟関係を少しも感じさせない、ざっくばらんなお人柄に相応しいような気がするのです。そういえば、私が入学した頃の教室の普通の会話では、先生付けで呼ばれるのは学生の方で、エライ先生方はすべて「さん」付け、一番エライ辻村先生にだけは「大将」とか「御大」(おんたい)とかいって御名前すら呼びませんでした。

私は相当に生意気な学生で、佐藤さんには直接間接にずいぶん突きました。そんな私に、院生時代に署名入りの御著書を2冊下さいました。覚えておいででしょうか？ その御著書は今でも懐かしく、時折手にしています。その一つ、

1950年に日本写真測量学会(古今書院発行)から出された「空中写真による土地調査と写真の判読」は、今日、地理学の分野では不可欠の研究手段になっている空中写真の判読法の、当時、海外にも類例を見なかった系統的な解説書なのですが、地理学教室の図書室にも無く、知る人も少なく大変に残念でなりません。空中写真を御専門の地形学に応用しようという御構想と実践は、まだ学部学生であった1943年に8ヶ月にわたって、故田山利三郎博士の調査団に加わってニューギニア調査に行かれた後、陸地測量部の囑託になられた時からであったと伺っ

ております。その後、珊瑚礁、カルスト地形、火山、断層地形、あるいは1958年から着手されたアンデス山脈の地形研究に、空中写真を駆使された御研究の成果を次々にあげられました。しかし、ニューギニア調査の際、不幸にして罹患されたマラリアのため、その後必ずしも十分な御健康に恵まれず、お仕事の多くが未完成であることが惜しまれます。

かつて一時期、私は佐藤さんと同じ部屋で過ごしたことがありました。その頃佐藤さんはアンデス山脈の研究に没頭しておられ、図上作業に明け暮れておいででした。世界最長山脈の作業の結果が、少しずつトレーシングペーパーのロールの太さの変化となってあらわれていくのが印象的でした。“学問ノ道ハ長ク退屈デアリ忍耐ヲ要スルコトハ並大抵デハナイ。”(教室日誌、第14号、1944.8.7、佐藤記)

佐藤さんは大変なはにかみ屋で、何事にも控え目な御性格の持ち主ですが、言うべきところは歯に衣きせず、ずばりと意見を述べられる、学生にとっては大変こわい先生でした。佐藤さんほど丹念に卒業論文や修士論文を読まれる先生はおそらく少ないでしょう。私などは論文の余白に書き込まれた佐藤さんの寸評を読むのが楽しみで、論文の回覧が佐藤さんの後になることを願ったものです。辻村先生時代から行われている、全教官と全学部学生が一堂に会して毎週行う学部ゼミ、自然地理学関係の全教官と自然地理学専攻の全大学院生とで行う大学院ゼミ

でも、佐藤さんの舌鋒鋭い質疑には大ていの学生はタジタジでした。しかし、寸評にしろ、討論にしろ、単なる批判のための批判ではなく、学生の将来を考えた教育的配慮の行きとどいた内容でした。

私は、そんな議論好きな御性格をすでに大学院生時代からお持ちであったことを教室日誌で知りました。1936年に第1号が書かれてから今日まで、地理学教室の学生によって大学ノートに書かれた日々の記録と感想、意見、教師へのうらみつらみの数々が、すでにミカン箱一杯になって教室に保存されています。第1号の4ヶ月に1冊というケースを除くと、通常6~10ヶ月に1冊の割合で書きためられてきましたが、佐藤さんが「院長」吉川さんが「副院長」小堀さんが学部学生であった1944年の夏には、談論風発し、第14号は7月31日から9月30日の2ヶ月間に、署名不要なほど特徴のある文字でびっしりと埋められるという、空前絶後の事態が起っています。この号に書かれた佐藤さんの文章には、敗戦の色濃い1944年の異常な事態の下で書かれたものであるにもかかわらず、35年余の歳月を感じさせない新鮮さをもってわれわれ地理屋の共感を呼び起こさずにはおかないものがあります。私はその透徹した主張に驚き頭が下がる思いがしました。せっかくの機会ですから、後輩のためにここにその一部を引用させ

て頂くことをお許し下さい。

“地理学トハ、此等現在ニ於ケル極メテ専門化シ、オ互ニ甚シク遠ザカッタ諸学ヲ綜合シ一ノ学トシテ組合セタモノヲ意味シマス。……地理学ナル綜合科学ノ中ニ含マレル専門学ヲ夫々ノ専門学トシテ深メルノデハナクシテ、アク迄モ総合的ニ相互ニ關係アル学ヲソノ關係ヲ保ッタママ、否、更ニソノ連関ヲ強メツツ深メルコトヲ意味シマス。……モトヨリ地理学ヲ上ニ述ベタ如キ意味デオサメ、進歩サシテユクタメニハ困難ハ多イデセウ。然シナガラ、ソレヲヤリトゲルコトナクシテハ地理学ノ真ノ發展ハ不可能デアルト思ヒマス。カクテハ地理学ナル母ハ夫々ノ息子ノ生長ニ一ノ望ヲ託シテサビシク墓穴ニ入ルノミデス。然シ地理学ハ母ナルガ故ニ子供ト共ニ永久ニ生キルコトハ出来ナイデアラウカ。私ハ断ジテ否ト考ヘマス。此ノ母ヲシテ死セシムルカ、尚潑刺トシテ活躍セシムルカハ我々ノ努力如何ニアルト。”（教室日誌、第14号、1944. 8. 14）。

私には先生の御健康のことがどうしても気掛りでなりません。健康を保つには若い人達と絶えず接していることが第一かと思います。どうかこれからも教室にお出掛け頂き、私たちをはじめ学生達と議論して下さいを願ってやみません。そして未完成のお仕事を完成されることを期待しております。



佐藤 久 先生

- 大正 9. 4. 1 出生
- 昭和 13. 3 秋田中学校卒業
- 16. 3 水戸高等学校理科甲類卒業
- 18. 9 東京帝国大学理学部地理学科卒業
- 18. 10 } 東京帝国大学大学院
- 23. 9 }
- 24. 12 東京大学講 師 (理学部)
- 27. 8 " 助 教 授 (")
- 36. 3 " 教 授 (")